

浮気妻の制裁

第十一卷　ご近所さんにバレた
シタ妻の遊戯

海老沢　薫　著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 ご近所さん達の前で絶頂

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「浮気妻の制裁 第十一巻 ご近所さんにバレたシタ妻の遊戯」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し

た場合を除き、本書の一部、または全部を、

あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子フア

イル、ビデオ、テープレコーダー)により複

製、流用、転載、転売することを固く禁じま

す。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第

619条などの罰則がありますのでご注意ください

い。

■ まえがき

若妻、萌々は早朝、隣家の麻子の部屋で窓際に全裸で緊縛され、麻子とマンション管理人の二人から屈辱の羞恥プレイを受けることになった。

やがて、管理人が部屋から出て行き、麻子と二人きりになっても、萌々は窓際に緊縛されたまま秘部に挿入されたバイブで快感責めに遭い悶え狂い続けた、

そして、いつしか昼を迎えると、悶える若妻に麻子は衝撃の事実を告げる。

「萌々ちゃん、もうすぐここにお客さん達が来るから、少し大人しくしてなさいよ！」

麻子の思いがけない言葉に驚き、思わず快感を忘れ体を硬直させてしまう萌々。

こんな恥ずかしい姿を他の誰かに見られると思うと、萌々はどうしようもない不安に襲われ、同時に全身を快感が駆け抜け、体は急速に燃え上がっていった。

「ああん、お願い許してください・・・」

萌々は悶え狂いながら麻子に必死に許しを乞
うたが、ついにその時は訪れ・・・。
玄関のチャイムが部屋の中に鳴り響くと、
麻子は慌てて玄関へ向かい、窓際に緊縛され
たまま一人放置された萌々は、どうしようも
ない不安と快感の狭間で気がおかしくなりそ
うになった。
「ああん、もうダメえ・・・」
萌々がメスの喘ぎ声を上げた瞬間、部屋の中
に四十代の女性達が現れ、彼女達は窓際に緊
縛された素っ裸の美女に気づくと「キャッー
という悲鳴を上げた。
「ああん、いやあっ見ないで・・・イクつい
クっイクっイクううう」
萌々は彼女達の驚く顔を見ながら断末魔の叫
び声を上げ、彼女達の前で下半身を激しく痙
攣させて、勢い良く潮を吹き上げたのだった

■ 第一章　　ご近所さん達の前で絶頂

萌々は素っ裸で窓際のカーテンレールに両手を縛られたまま、恥ずかしそうに太股を擦り合わせて悶えていた。そして萌々の視線の先には慌ただしく朝の家事をこなす麻子の姿があった。

同じマンションに暮らす隣の麻子の部屋で裸のまま身動きもとれずにいる萌々は、これから一体どうなってしまうのか分からず、不安でならなかった。

若妻の秘部の奥にはまだバイブが埋まったまま、それを動かすリモコンは目の前のテーブルの上に置かれてあった。もしも麻子にまたそれを動かされたら・・・。そう思うと萌々は思わず下半身がジーンと熱くなるのを感じた。

さっきまでこの部屋にいたマンションの管理人にバイブを巧みに操作され、あろうことか何度もイッてしまった萌々は、どうやらあ

の時の快感の余韻がまだ体の奥で燻っている
ようだった。
もう一度さっきみたいにイキたい。
萌々はいっしかそんな事を考えるようになり
窓際に緊縛された体を揺らしながら麻子の姿
を目で追いかけていたのだ。
すると、洗濯物を干し終えた麻子は、そん
な若妻の様子に気がついたのか、まるでテレ
ビを付けるような感覚でダブルの上に着か
れたバイブのリモコンのスイッチを入れた。
「あああん」
再び秘部の奥でバイブが激しく振動し始める
と、萌々は思わず体を仰け反らせ、大きな喘
ぎ声を放った。
「フフツ、ほんとスケベな女ねえ」
麻子は呆れた顔で呟くと、リビングの掃除を
始めたのだった。
「ああん、ああん」
バイブは容赦なく萌々の秘部の奥で蠢き、
萌々は淫らな表情を浮かべて喘ぎ続けた。掃

除機を掛けている麻子は、そんな若妻の姿を
時折チラッと眺め、不敵な笑みを浮かべた。
この後死ぬほど恥ずかしい目に遭わせてあ
げるから覚悟しなさい。・・。麻子は悶え狂
う若妻に向かって心の中でそう呟き、淡々と
朝の家事を続けた。
それから麻子が忙しく家事をしている間
に、萌々は秘部の奥で蠢くバイブによつて幾
度となく果てることになった。
「ああん、もうダメえ、イクっイクっイクっ
イクうううー」
若妻のメスの叫び声が部屋の中に響く度に、
麻子は家事の手を止めて、そのイキ様を拝ん
だ。
美しい若妻がイク姿は何度見ても飽きるこ
とはなく、麻子に何とも言えない心の高揚と
優越感をもたらした。
「ほんと哀れねえ。・・。」
麻子はイキ果てた若妻の姿を見つめながら、
ポツリと呟いた。体の自由を奪われ、バイブ

の振動で何度もイカされる若妻は確かに哀れで、まるで見えない誰かに強姦されているようにさえ映った。快感の余韻から覚めた萌々は、麻子が自分に向ける哀れみの眼差しに気づき、どうしようもない屈辱に塗れた。お願い、そんな目で私を見ないで……。萌々が心の中で必死に叫ぶ声が麻子にも聞こえたのか、麻子はニタツと微笑んだ。萌々の脚元のフローリングには、秘部から溢れ出た蜜でいつしか小さな水溜りが出来上がった。が、つていた。――あんまり家の中を汚さないでくれる！――ビッシヨリと濡れた床を見た麻子は、悶える若妻をきつく叱りつけた。――ああん、ごめんなさい……。――萌々はすぐに謝ったが、秘部の奥では絶え間なくバイブが振動し続け、止めどなく溢れ出る蜜が水溜りをさらに広げていった。

そうして、何度も果てた萌々が軽く気を失
いかけていると、いつの間にかお昼を迎えて
いた。すでに家事を終えた麻子は、ソファに
座りお茶を飲みながえ、萌々の裸身をじつく
りと鑑賞していた。
「いやぁん」
不意に羞恥に襲われた萌々は、体を懸命に振
らせてどうにか麻子の視界から逃れようとし
た。
しかし、両手を万歳の恰好で縛られていて
は乳房も恥毛も全く隠す事ができず、逆に麻
子の加虐心を煽るだけだった。
「萌々ちゃん、もうすぐここにお客さん達が
来るから、少し大人しくしてなさいよ！」
麻子が強い口調でそう呼び掛けると、それま
で悶え狂っていた萌々は思わず体を硬直させ
酷く驚いた表情で麻子を見つめた。
もうすぐお客さん達が来るってどういうこ
と？お客さんで一体誰なの？こんな姿を知ら
ない人達に見られるなんてウソでしょ・・・

萌々は麻子の思いがけない言葉に頭の中か混乱し、それまで下半身から突き上げていた快感さえも一瞬忘れてしまっていた。
「ああん、いやあん」
再び快感に襲われた萌々は大きな喘ぎ声を上げ、腰を揺らした。
こんな恥ずかしい姿を見ず知らずの人達に見られたらと思うと、萌々の胸の奥にどうしようもない不安が込み上げ、それが全身を襲う快感と相まって体は急速に燃え上がっている。
「ああん、お願い許してください・・・」
萌々は悶えながら目の前のソファに座る麻子に許しを乞うた。
幾ら何でも、もうすぐこの部屋にやって来るという客達にこんな姿を見られるわけにはいかなかった。麻子やマンシヨンの管理人の前で辱められるのはもう仕方ないとしても、これ以上他の誰かの前で屈辱を味わうのは我慢できなかった。

「萌々ちゃんは露出狂の変態なんだから、色んな人に裸を見られた方が嬉しいでしょ（笑）」

麻子は笑いながらそう言っ、萌々の願いを全く聞き入れようとしなかった。

「ああん、そんな・・・」

萌々は快感に悶えながら恨めしそうに麻子を見つめた。

するとその時、部屋の中に『ピーンポーン』という玄関のチャイムが鳴り響いた。その音に萌々の体は自然と身震いし、差し迫る危機を予感したようだった。

「あら、もうお客さん達が来たみたいだわ」

麻子は嬉しそうにソファを立ち上がり、インターホンのモニター画面に映る来訪者に応答した。

麻子が玄関に向かい、リビングに一人きりとなった萌々は不安に押し潰されそうになる心と、快感の頂きに到達しようとする体の狭間で気がおかしくなりそうだった。

「ああん、もうダメえ・・・」
 体が心を押しのけ快感の頂きに到達するのを
 感じた萌々は、大きなメスの叫び声を放った。
 するとその瞬間、リビングに四十代の女性
 達が入って来て、窓際に緊縛された全裸の若
 妻の姿を見た彼女達は「キャッー」という大
 きな悲鳴を上げた。
 「ああん、いやあっ見ないで・・・イクつい
 クついイクついクうううー」
 萌々は彼女達の驚く顔を見ながら断末魔の叫
 び声を上げると、下半身を激しく痙攣させて
 勢い良く潮を吹き上げたのだった。
 萌々はそのままグッタリと項垂れ。秘部に
 埋まっていたバイブは脚元の床にポロリと落
 ちた。
 「この人って、このマンションに住んでいる
 白石さんじゃない」
 「素っ裸で一体何してるの？」
 「この人今、イツたわよね？」
 「それにしてもスゴイ体つきねえ」

麻子の部屋のリビングに入ってきた女性達は、皆唾然とした表情を浮かべながら、ゆっくりと窓際の方に近づき、イキ果てた若妻の姿を舐め回すように見つめた。

麻子は少し離れた場所からその様子を面白そうに眺めていた。麻子の部屋にやって来たその女性達は皆、同じマンションに住むご近所の主婦達で、彼女達は今日の前に素っ裸で緊縛されている萌々のことも当然良く知っていた。

麻子と同世代の彼女達は、萌々がこのマンションに引越してきた時から、麻子と同じようにその類い稀な美貌と抜群のスタイルに嫉妬し、あまり快くは思っていなかった。マンションの廊下などですれ違った時にはいつも笑顔で挨拶を交わしていたが、心の中ではいつつかこの自分達よりも若く美しい女を徹底的に辱めてやりたいと思っていたのだ。

そんな若妻が今日の前に素っ裸で両手を緊縛されて立っているのだ。しかも、自分達が

この部屋に入ってきた瞬間にみつともないメ
スの喘ぎ声を放ちながらイッたのだ。そのあ
まりにも凄まじい若妻のイキ様を目撃した彼
女達は、互いの顔を見ながら意味深な笑みを
浮かべ、この部屋で何が起きていたのか何と
なく察したようだった。
そして、彼女達はこの部屋の住人であり、
ご近所仲間の女王的な存在である麻子の方を
振り向くと、意味深な笑みを浮かべたまま頷
いて見せたのだった。

■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>